ロンドン日本人学校での現地校交流実践

前ロンドン日本人学校　教諭
北海道沙流郡日高町立富川中学校　教諭　土　屋　和香子

キーワード：現地校交流、総合的な学習の時間、異文化理解、俳句、紋切

１．はじめに

平成26年４月から平成30年３月まで、ロンドン日本人学校に勤務をした。帰国してからというもの、会う人会う人に必ず聞かれることがある。「イギリスってやっぱり食べ物おいしくないの？」。

かつてのことはわからないが、少なくとも私の経験上、現在の英国は決して食べ物のまずい国とは言えないと思う。それなのに一体このイメージはどこからくるものなのか。そうは言っても、私自身、ロンドンで生活する経験がなければ、「イギリスは食べ物がおいしくない」というイメージを持ち続けていたであろうことは容易に想像できる。ロンドンでの４年間は、このように、英国や日本や様々な物事に対する「イメージ」や「思い込み」を良い意味でたくさん覆された貴重な時間であった。

そして、これはまた、日本から転校してくる多くの生徒が一様に経験することでもある。英国に来て初めて知ること、また、日本を外から見て初めて気づくこと等々、彼の地に暮らしたからこそ得られる貴重な経験・考え方・価値観がある。それを、人生の財産として自分の中に蓄えていってほしいという願いを込めながら取り組んできた教育活動の一端について、私が４年間担任を務めた中学部３年生の「現地校交流」の実践を通してここに紹介したい。

２．ロンドン日本人学校について

ロンドン日本人学校は、英国の首都ロンドン西部のアクトン地区に位置する。英国は英語圏であるため、特に昨今は、子どもたちを現地の学校（以下、現地校）に入学させたいと希望する家庭が年々増加している傾向にあるが、それでも日本人学校を心の支えや拠り所にしている児童生徒や保護者も多くいる。よって、同校では、日本の学校と同じ教育が受けられる環境を整えながら、同時に英国にある利点を最大限に生かした「現地校交流」「英会話授業」「修学旅行（小６ 北ウェールズ　中２ スコットランド）」「校外写生大会」「自然体験教室（小５ イングランド西部）」「遠足・校外学習」「職場体験学習（中学部２年）」といった特色ある学習や体験活動を数多く展開している。

様々なバックグラウンドをもつ生徒が通う同校では、児童生徒の転出入により毎年学級や学年の３分の１程度が入れ替わることも珍しくない。また、日本で生まれ育った児童生徒、日本での生活経験が全くない児童生徒、英語が非常に堪能な児童生徒、一方で、日本の中学生同様、英語に苦手意識をもつ児童生徒が共存しているという実態がある。よって、児童生徒一人ひとりを取り巻く環境や英語力を鑑みながら、どの生徒も意欲的に取り組める学習活動を行うことが重要となる。

３．「現地校交流」について

ロンドン日本人学校では、「ロンドンタイム（London Time：以下LTと略す）」と呼ばれる総合的な学習の時間に「現地校交流」を行っている。これは、小学部１年生から中学部３年生までの全学年が、現地校に通うほぼ同年齢期の児童生徒と、それぞれの発達段階に応じた活動に協働して取り組むことを通して、「積極的に交流し、互いの文化を理解する児童生徒」の育成を目指すという活動だ。

現地校交流では、互いの学校を訪問し合い、それぞれの学校生活を１日体験するという経験を通し、互いの文化や考え方、学校の様子等について理解したり、現地校の生徒と交流したりすることができる。そのため、この

日を楽しみにしている児童生徒も多いが、一方で、交流言語である英語に自信のもてない生徒にとっては、大きな緊張を強いられる活動でもある。よって、前述のように、どの児童生徒にとっても、活躍の場があり、積極的に取り組める内容の活動を計画することが重要となる。そこで、「英会話授業」を担当する英会話講師との連携を図り、交流当日までに、英会話講師を現地校の生徒に見立てた活動本番のリハーサルをしたり、アドバイスを得たりすることで、児童生徒が少しでも自信を持って本番に望めるようにするという時間をどの学年でも設けている。

４．中学部の現地校交流について

中学部の現地校交流では、各学年担任の担当教科と関連付けた内容の活動を行うことになっている。日本人学校生徒と現地校の生徒が英語でコミュニケーションをとりながら、学習と交流を深めることができるように、例えば社会科では「日本のおすすめの旅行計画を立てる」、理科では「ブラックボックスの中の回路を当てる」といった学習活動がこれまでに実践されてきた。

私は、国語科の担当であるため、「俳句」を題材にした交流活動を計画した。「俳句」は、今や「Haiku」として世界中に愛好者を集めていることに加え、そもそも日本人の季節感や自然を愛でる心、考え方等がよく表れているため、日本文化を紹介する活動の題材として適切であると考えたためだ。

(1) 俳句紹介に関わる事前の学習と準備（国語科、英語科、LT）

活動には、季節ごとに色分けされた取り札に、一句ずつ俳句が書かれている「五色名句百選かるた」（東京教育技術研究所）（以下、「俳句かるた」と略す）を用いた。まず、各季節（春・夏・秋・冬・新年）４～５枚、合計20句前後（生徒の人数に合わせる）の俳句かるたを選び、それぞれをあらかじめ英語力などを鑑みながら設定した１～２名のグループに１句ずつ割り当てる。生徒はグループごとに、割り当てられた俳句の解釈や季語、俳句の理解に必要な資料や情報をまとめたプレゼンテーション資料を作成し、英語での発表原稿を準備する。当日は、このプレゼンテーションに加え、現地校の生徒が気に入った俳句を筆ペンで書く「書写体験」や、現地校の生徒にかるたの取り方を教える活動を行うため、その際のコミュニケーションに必要な英会話表現を確認したり、英会話講師と活動のリハーサルをしたりする時間も設ける。

ところで、俳句を現地校の生徒に説明するためには、まず生徒自身が俳句に対する基本的な知識理解を深めること、そして自分なりに俳句を鑑賞し、解説できるようになることが必要である。また、交流当日の活動は基本的に英語で行うことから、英語科との連携も不可欠である。よって、事前の準備は、「①国語科の授業で俳句について学習する。②国語科と英語科の授業で、現地校生に紹介する俳句の説明用プレゼンテーション作成に取り組む。③英語科でプレゼンテーションの原稿を作り、発表の練習を行う。④英会話講師にプレゼンテーションを行い、アドバイスをもらう」という流れで行った。

(2) 紋切紹介に関わる事前の学習と準備（英語科、LT）

各教科の取り組みと同時に、中学部では全学年統一して「紋切」を紹介するという活動にも取り組んでいる。「紋切」とは、江戸時代から親しまれている、様々な紋を切り抜く紙切遊びのことである。折り紙を１～５回（紋によって異なる）折り畳み、その上に型紙を合わせてハサミで切り抜いてから折り紙を開く。すると、幾何学的な美しい文様が現れるため、現地校の生徒にも喜ばれる活動である。ある程度パターン化した英語を使うことでやり方を説明することができることから英語をあまり得意としていない生徒にとっても、英語でのコミュニケーションを図るチャンスになる。事前準備は、「①生徒自身が紋切のやり方を知る。②紋切のやり方を英語で説明する方法を学ぶ。③英会話講師を現地校生に見立てて実際に説明を行い、紋切に取り組んでもらう」という手順で行った。

(3) ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）等の活用

俳句のプレゼンテーション資料は、パワーポイントを用いて作成した。また、紋切を作成する過程をパワーポイントにまとめた資料をあらかじめタブレットに保存しておき、それを見ながら紋切の説明に必要な英語の表現を確認したり、説明の練習をしたりできるようにした。また、各自が作成した俳句紹介のプレゼンテーション資料もタブレットに保存しておき、適宜、プレゼンテーション練習ができる環境を整えた。

５．実際の交流と生徒の様子

以下は、現地校生のロンドン日本人学校訪問当日の日程例である。

時	時間（場所）	活動内容	準備
1 校時	9：30 （体育館） 9：35 9：20	①　歓迎会（司会：生徒） (1) ロンドン日本人学校生徒代表の挨拶 (2) 校長先生の挨拶 (3) 現地校生徒代表の挨拶 (4) 日程の説明・かるたのデモンストレーション (5) 自己紹介（グループを作る生徒を互いに確認）	ネームカード テーブル かるた
2 校時	9：55 10：30	②　活動１　俳句プレゼンテーション 「俳句の概要」及び「俳句」の紹介・説明	プロジェクタ パソコン
3 校時	11：00	③　活動２　筆ペンでの「書写」体験 (1) 現地校生徒の書きたい句を確認 (2) 筆ペンの扱い方を説明 (3) 練習・清書 ④　活動３　紋切制作 (1) 紋切紹介 (2) 制作 ※　俳句の清書と紋切ができたところで、画用紙に貼り、作品（記念品）として完成させる	「書写」 俳句かるた 筆ペン・下敷き 半紙（切ったもの） えんぴつ 「紋切」 千代紙、型紙 はさみ、のり
4 校時	11：55 12：30	⑤　活動４　かるた練習会 (1) かるたの取り方（覚え方）を教える (2) かるたを取る練習をする (3) かるた大会（各学級ごと）	俳句かるた 俳句かるた資料
昼食		⑥　昼食（晴天時は校庭、雨天時は各教室）	
昼休み		校庭等で一緒に遊ぶ（サッカーなど）	
清掃		清掃活動に一緒に取り組む	
5 校時	2：00 （体育館） 2：30	⑦　お別れ会（司会：生徒） (1) ロンドン日本人学校生徒代表の挨拶 (2) 現地校生徒代表の挨拶 (3) 記念写真撮影 (4) 見送り	マイク 記念品

６．成果と課題

現地校交流の中で、「俳句」について説明したり、現地校生が「俳句かるた」を取れるように教えたりする活動を行うと生徒に初めて伝えた時、その反応は決して前向きなものではなかった。まず、自分たちにとっても難しい俳句を、現地校生に、しかも英語で伝えることに困難を感じたからだろう。しかし、国語科、英語科、LT、そして英会話と、それぞれの授業を効果的に連携させることで、事前の準備にしっかり取り組むことができ、当日のプレゼンテーションは、現地校の生徒や引率者にも好評を得ることができた。また、かるたの取り方や覚え方を教える活動については、日本語がわからない現地校生には教えようがないと、当初はかなり消極的だったのが、当日は、現地校の生徒が予想以上にかるたを楽しんでくれたこともあり、かるたを教えるという活動を通して、英語によるコミュニケーションを懸命に図ろうと個々に工夫を凝らす姿が見られた。また、活動の最後に

行った現地校生徒によるかるた大会は、自分が教えた相手がかるたを取るたびに大歓声が上がるという大盛況だった。

一方で、紋切は、作り方の手順を一度説明すると作品作りに没頭してしまい、会話がなくなってしまうという場面も見られた。ある程度きまった英会話フレーズを使って説明ができるという点では、特に英語に苦手意識がある生徒にとって、「説明することが多い＝英語を使って意思疎通できた」という達成感を味わうことができる活動ではあるが、互いに言葉を交わす必然性のある活動をさらに模索していくことが望ましいだろう。最後に、画用紙に紋切と書写の作品を貼ってラミネートした記念品をプレゼントしたところ、現地校の生徒が大変喜んでくれたことも、生徒にとっては大きな達成感につながった様子だった。

現地校生徒が作った作品

現地校交流後に振り返りの時間を持つと、生徒は毎回必ず「もっとスムーズに意思疎通ができるようになりたい」という感想をもつ。英語に苦手意識をもっていた生徒でさえ、「次こそは」という言葉で、次回への課題と克服したいことを書く。同世代の仲間と交流することで、意外と簡単に外国の人とも心を通わせられるということ、英語が話せることでよりコミュニケーションが図れるようになるということが実感を持って経験できるため、それが英語学習への動機づけとなったり、より世界に目を向けるきっかけになったりしていることは間違いない。現地校交流の持つ価値は、非常に大きいと言えるだろう。

７．おわりに

ロンドン日本人学校での勤務の中で、今でも忘れられない印象深い出来事がある。それは、受験のために一時帰国していた中学部３年生の生徒が、学校に戻ってきてから言った言葉だ。

「先生、日本はなんか不思議な感じがしました。日本人しかいないんです！」

「電車の中も異様な感じでしたよ。誰も話をせず、みんなスマホ見てるんです」

この２人の言葉に、私は新鮮な感動を覚えた。果たして、私はこれまでにこんな視点で日本を捉えたことがあっただろうか。「日本人しかいない」ことや「電車で全員がスマホを見ている」ことに違和感を覚える生徒の視点は、日本にいたのでは持ち得なかったものに違いない。単純に、日本と英国のどちらが良くてどちらが悪いというのではなく、それぞれの当たり前が、視点や立場を変えると当たり前でなくなるということを身をもって実感できるのは、大変貴重な体験であると言えるだろう。そう考えると、改めて、その土地に暮らすということの価値が見えてくる。

日本人学校に通う児童生徒が、これからも、そうした発見や学びや気づきを大切な財産として心の中に蓄えていってくれることを切に願うとともに、私自身、ロンドンでの４年間で得られた貴重な体験をしっかり還元していきたい。